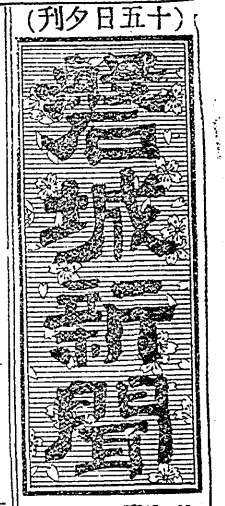
（十五日夕刊）



休刊 大祭第一第三日曜
発行所 磐城新聞社 電話五六四番
印刷人 福島縣平町田町拾六 鈴木龍輔
定價（一ヶ月壹圓二十錢、三ヶ月壹圓五十錢、六ヶ月二圓、一ヶ年四圓）廣告料（一行平均五十錢、指定廿錢增）
壹枚二錢、郵税十錢

（大正十年四月二十二日第三種郵便物認可）　昭和四年四月十六日　磐城新聞　［火曜日］　第二千五百十號　（一）

花と西行を語る

あさひ重康

自然に梢を離れる花もわびしさに止めどなくこぼれる人の涙も、心は同じ哀れな姿に於て相結びつけられる、この關心は既に自他の境界を超越して西行と花とを同一の線分によつて連絡願の作ではないかも知れぬするものである、若し二點詞辭によれば或年の春を經を結ぶ線分が點の連續延長て、花に絡はる思ひで多いであるならば彼の心はとりもわが身を詠嘆したのでもあなほさず花そのものに外らう。けれど彼の晩年には ならぬ、美しい花の末路と催にかうした心のあつたこと寂しい心に於ては涙であ を思ふのである。而も彼そしてこの涙は花のやうに自ら經來つた多くの春の香浄く、花のやうに哀れな涙を獨りわが心に深く染め留であつたに違ひない。 くには、餘りに口惜かつた願はくば花のしたにて春 ものと見えて 知なんそのさらぎのもちづきのころ あはれわがたほくの春の 花を見てそめおく心誰に 佛には櫻の花をたてまつ ゆづらん れわが後の世を人とぶら とも詠じてゐる、つまりそ はば れだけ淺からぬ思ひ出を花 彼は途に月に對して來世にかけてゐた彼を見ることを まで期待してゐたやうに 出來るのである。 花についても、その中に臨 かくて愛花詩人西行はか終を迎へ、花と共にその幽ねく〳〵希求しつゝあつた如魂を長へに慰めたかつたく、建久元年二月十六日であ （拾玉集）恰も山櫻の色づ

彼は晩年になつて心靜かき初むるを、この世の見納にその永い放浪の跡を回顧めに流石としてなほ未練 してゐる、先ず回顧に上つ 傳へられてゐるがさて振てくるところのものは春で かへつて、彼が花を觀賞ある。あこがれの花をめぐ た心持を考へてみると つて夢の如くに浮びあがよしの山花をのぞかに目 る幾多の春の思ひ出である。 ましやはうきがうれしき 彼はそれに 我身なりけり たぐひつかな春は心の花にあるやうに何處までも寂のみいづれの年かうかれしさの中にうき心もて眺めてゐたことが分るのである

波浮の港（替歌）

小川郷　吉岡獨歩

主のお舟は　暮れても來ない
鹽屋岬にや　燈臺あれど
夜の船路は　ヤレホンニサ無事ぢやや
出船せかれりや　小名の港にや
はかない別れ　入船用船
濱の娘たちや　江名や豊間は
荒波育ち　ヤレホンニサ漁つゞき
なぢよな心で　夏の干潟に
ヤレホンニサ待ちるやら　背中を乾した
磐城七浜　若い男の
自慢ちやないが　噂の花が
四倉港も　ヤレホンニサ磯に咲く
ヤレホンニサ泣き別れ　人眼しのんで
新舞子まで　濱の娘たちや
横川船の　もやひつかんで
ヤでレホンニサ泣き別れ

鏡

葉山不二子

一人かくれて泣く時は　なぜかわたしは鏡みる
淋しく泣いた心もて　鏡の前にたつときは
共に悲しみ共に泣く　一人かくれて想ふとき
なぜかわたしは鏡みる　ひそかに慕ふ心もて
鏡の前にたつときは　共に苦しみ共に想ふ

㊗……三四
明　舊月　新月
日　の　十
㊗……吉凶……㊗
曆七　曆六
日　日

▲一白　正しき道に入りなば何所までも進みてよし
二黑　移比と口を愼みて和闘すれば大吉と成る▲三碧　小事には差支なきも大事は後日に廻すが吉▲四綠　輕々しく乘り氣になれば存外の破敗を被る▲五黃　區々たる小節を捨て高處より大觀して進め▲六白　積日苦心の効果現るゝ但し知合大切の事▲七赤　甲斐なき外事に羊勞するより內を整ふか利得▲八白　待ちに待ちたる花開く日名弘め開店何れも吉▲九紫　運氣揚がるすなす事多く行違ひを生ずる日

講談

蒲生氏郷

（208）

渡邊默禪作
宮野歌春講

あゝ雪江は善を以て惡に、彼の高潔な心事は斯くして全家の人、一族の人、一師閥の人を泣かせた、近江屋へ飛つて承諾せてやらうと期してゐた、情はこれのみに止まらなかつた、近江屋へ飛つて承諾させ在金の中から母へ千兩の外に衣類三棹、富藏へ三百兩の金をめぐむことにしたのである、若し二點詞辭によれば或年の春を經て、花に絡はる思ひで多いを結ぶ線分が點の連續延長であるならば彼の心はとりもわが身を詠嘆したのでもあなほさず花そのものに外らう。けれど彼の晩年には ならぬ、美しい花の末路と催にかうした心のあつたこと寂しい心に於ては涙であ を思ふのである。而も彼そしてこの涙は花のやうに自ら經來つた多くの春の香浄く、花のやうに哀れな涙を獨りわが心に深く染め留であつたに違ひない。 くには、餘りに口惜かつた願はくば花のしたにて春 ものと見えて 知なんそのさらぎのもちづきのころ あはれわがたほくの春の 花を見てそめおく心誰に 佛には櫻の花をたてまつ ゆづらん れわが後の世を人とぶら とも詠じてゐる、つまりそはば れだけ淺からぬ思ひ出を花 彼は途に月に對して來世にかけてゐた彼を見ることを まで期待してゐたやうに 出來るのである。 花についても、その中に臨 かくて愛花詩人西行はか終を迎へ、花と共にその幽ねく〳〵希求しつゝあつた如魂を長へに慰めたかつたく、建久元年二月十六日であ （拾玉集）恰も山櫻の色づ

彼は晩年になつて心靜かき初むるを、この世の見納にその永い放浪の跡を回顧めに流石としてなほ未練 してゐる、先ず回顧に上つ 傳へられてゐるがさて振てくるところのものは春で かへつて、彼が花を觀賞ある。あこがれの花をめぐ た心持を考へてみると つて夢の如くに浮びあがよしの山花をのぞかに目 る幾多の春の思ひ出である。 ましやはうきがうれしき 彼はそれに 我身なりけり

讀者欄

春宵の思出

粹　男生

まだといふに婚姻千に對して離婚が百を突破する現代だといふに婚姻も突破する現代だといふに婚姻も突破する現代だといふに婚姻も突破する現代だといふに婚姻も突破する現代だ折角つのかくしをして隱しかるべき天女にも紛らかに嫁入りした人の內で十組に一組は離婚の憂き目を見る。

國民の半數を占めてゐる婦人が子を產むといふ重大な責任を負はされてゐながら公民權が附與されないばかりか、理行の普選は永久に片輪に、女とおなじく片輪

一人前でないと考へてゐる男も片輪なのだ。

結婚とは人格の完成を目的とする異性の結合だといふ人、令孃等々然り。

花遊びはする、人妻、未亡飯も炊けない女ほど亭主を

なまじ中半凡な遊びでは面白くないとあつて役者は買ふ、か。

碌な經驗も出來なければ

簞笥、長持、髮の道具かつら衣類萬端頭の先から足の先んで一人の娘を片づけるのに千兩箱一つは飛ぶ財產を選すには必ずしも藝妓や酒呑みばかりには限らない今の世に三人の女の子を持てば樂に財產を使ひ果せる。

舟の魚獵に取られてたほろなり。

虛榮の權化の花嫁さま衣物と持參金で貰はれて來た化嫁さま肉の香に飢た花婿

雪江にその男を取り持とうと云ふ氣は起らなかつた。

春向が澤山入荷いたしました
ナフトール着尺
着尺モスリン
セルネル
帶皮
其の他色々
どうぞ御用命を願ます
亀田屋
電話五七

解決したが只一つ解ぬ？が、雪江の胸に橫たわつてゐる、それは梶原に對する戀？

雪江の胸の扉深く秘めた思ひ、若き命の星と燃に花と亂るゝ血のゆらぎをそれと知り拔いてゐるものは老仲間の輿平とお君とである輿平は白髮頭にもなほ昔の經驗から來た戀の香を失せずにゐる、粹知りであるに察しの良い爺さんである、雪江が惚れたのも無理ないと同情してゐる、折が

に打たれて蹴られても乘り殘る問題は大阪の木村逸換ねる心はなく斷然として齋と名乘つてゐる青柳正太はねつけたそうかと言つて夫、彼の有家を探して取押へることであるが、富藏もに萬も知らぬとの答へでゐるので手の着けようがなかつた。

一切のいきさつも圖備

江戸前料理
平町二
魚清
電話六三三番

花見折詰　金廿錢より
スシ折詰　金廿錢より
設備も完全に出來ました江戸前の味を以て調理しお客樣に滿足を得る樣努めます
▼ぜひ御利用下さい
仕出部
すし部

營業種は
石炭
コークス
玉炭
磐城第一ノ石炭トシテ自他共ニ推稱スル
◎磐城炭礦ノ最上石炭
一、正味十貫目入　壹俵　金六十五錢
◎日本デー番評番ノ良イ東京瓦斯コークス
一、コークス　壹俵　金壹圓三十錢
◎木炭ノ三倍御德用ナ玉炭
一、玉炭　大箱壹箱　金貳圓
配達ハ一俵ヨリ致シマス
平驛前
阿部石炭商店
電話二三七番

貸切自動車の御用命は
昭和タクシーへ
高級車で乘心地の好い
昭和タクシー
平驛前
電話は二四三番
サシミ

お花見には
酒 磐の誉 瓶詰
△先約五千ケ限り　盃付
△花見手拭付二合瓶詰　三十錢
永山酒造店總發賣元
平町四丁目　電話二〇七番

平町田町
高久病院
電話五二三番
醫學士　高久忠
新潟醫學士　赤羽清
藥劑士　佐竹菊雄
內科小兒科、
外科花柳病科、
耳鼻咽喉科、
レントゲン科、

新築落成
耳、鼻、咽喉科（專門）
氣管食道科（專門）
平町南町（舊診療所向電一七〇番）
大和田醫院
大和田郡司
自炊の便あり

アイギ
こんど仕入れた正札堂のアイギの安賣り見て御座れいつも安いと御客の聲を早う聞きたい正札堂
一、雨の降る日にやゴム引マント　どんな嵐もなんのその
一、生地の自慢は黒セル茶セル　それに連添ふレンコート
一、早賣り安値はいつもの主義よ　角力に負けない豊富山
正札堂

木ノ芽 胃腸藥
健康第一
健康は胃腸から
クスリはホシ
星製藥株式會社
東京・大阪

磐城自動車學校ノ創立

青年諸君我等ハ我等ノ心身ニシツカリ合ツタ職業ヲ撰ビ其ノ職業ニ依リテ運命ヲ開拓スベキデアル近時文明ノ第一戰ニ立ツ交通ノ利器自動車ノ運轉手位面白ク愉快ニ紳士的職業トシテ前途洋々タルモノハ有ルマイ、現今運轉手ノ增加ハ自動車ノ增加ニ伴ハザル現狀ニアリ既ニ運轉手トナランカ年少氣銳ノ者ニシテ既ニ相當ノ收入ヲ得テ且ツ失業ノ憂ナク引張リ凧ノ有樣斯クテ殊ニ優秀者ニ至リテハ各屋主ノ大歡迎ヲ受ケツヽアル、アル先鋒トシテ活氣ニ充タサレテ生々ト働ク亦男子ノ快事ニアラズヤ然ルニ現時之等希望者ニ對シ之ガ操縱法及學術技能ヲ修得スルニ多額ノ費用ヲ要スルハ遺憾ナリ我磐城自動車學校ハ最低廉ナル費用ヲ以テ其目的ヲ達セシメ尤モ完備セルナル教師ヲ聘シ時代ノ新要求ヲ達成セシタル次第ナリ來リテ見ヨ而シテ諸君ノ最善ヲ發起シ諸君ノ運命ヲ開拓セラレン事ヲ

▲本校ノ內容（學則希望者ハ申込次第送附ス）

受驗科　一ケ月卒業　學術技能ノ經驗アル者
授業料（學科實習費共）一ケ月金參拾五圓
速成科　二ケ月卒業　初心者ニシテ速成ヲ望マル、者
授業料（學科實習費共）一ケ月金參拾五圓
本科　三ケ月卒業　初心者
授業料（學科實習費共）一ケ月金貳拾五圓
T型フォード　新フォード　シボレー
但シ授業料ハ各科共前納ノ事
入學資格尋常小學校卒業者及ビ之ト同等以上ノ學力ヲ有スル者

▲本校練習用自動車ハ
▲シボレー　▲新フォード　▲廿七年式フォード
▲本校ニハ通學ノ出來ヌ生徒ノ爲ニ寄宿舍ノ設備アリ月額約十八圓デス

新學期開始　昭和四年五月一日

公認　磐城自動車學校
四月一杯ハ　平町二丁目尼子自動車部
電話六四〇番ニテ取扱フ

仲裁者を無視するも甚し
常軌を逸した高橋氏の要求
地方産業の破壊と民心の惡化
妥協成立は望み難し

小名濱大敷網問題は漁期が眼前に切迫してゐる今日高橋側の暴擧によつて準備容易に渉らず地方産業上至大の損害を蒙るは勿論事態險惡な空氣が日々濃厚の度を加へてゐるので萬一を憂慮する平署の非常警戒等益々復活化し千葉平區才判所長が仲裁の勞を採るの要となり昨十四日兩者の會見を見たが高橋氏の要求は全く仲裁者を無視するも甚だしき常軌を逸した無謀の要求にして高橋氏が更らに充分の誠意を披歷せざる限り圓滿解決は望み難い模樣である

問題のもつれ行く原因
高橋氏に些さかの誠意なく
事件經過のあら筋

千葉才判長の仲裁により第一仲裁案に臨む場合の提議と一の會見日たる十三日は高橋氏の不參により延期となり昨十四日午前十時より小名濱、江名の兩漁業組合側と高橋氏側とが才判所に會見の運びとなつた

これより先き小名濱、江名の兩漁業組合側では高橋氏とは單に大曳漁業が許可になれば貸附すべしとの豫約をなしたが其後本縣人に限り漁業を經營單獨所有の「沖網」とは大敷せしむべしとの縣の依命通牒により高橋氏との豫約を取消し白井博之氏と正式貸附契約の上立派に登記を了したもので

今更高橋氏の暴擧により第三者の既得權利者たる白井合資會社に迷惑を掛ける事は忍び得ない事であるから或る程度の損害（高橋氏が使つた金）を兩組合より仕拂つても圓滿解決をせしめたいとの誠意から仲裁會に臨むだ處が高橋氏は

當初の契約七ケ年中爾後五ケ年は高橋氏が大曳を經營し前二ケ年に遡つて相當の損害を仕拂ふべしと謂ふ全く常軌を逸した無謀の要求を提議したが斯くの如きは目下係爭中の訟訴が高橋氏の主張通り參勝一理想的繭市場を設立すべく計劃中に昨年中は今年の春期からは取引が開始出來る

千葉才判長の仲裁案に臨む場合の提議と地方産業の蒙る損害實に甚大なものあり地方民は仲裁才判長の立場を無視するの結果如何に多大の注目を

更に十七日
兩者會見
結果如何注目

昨十四日の會見に於て不調に終つた仲裁案は千葉裁判長か如何にしても圓滿解決を促進せしむべく十七日更らに第二次會見をすることとなつたが高橋氏が誠意を以て臨まざる限り圓滿なる解決は望み難く結果は重大なる問題を惹起するに至るものの如く觀測されてゐる

世の春をよそに
失業者の惱み
めつきり殖えて來た
平紹介所の昨今

中町地方は松ケ岡公園の櫻度新事業として工費十九萬圓を以て漁港の改修並に工費二萬五千圓を以て小學校庭並平第一小學校庭に於て開催する筈であるがスポーツ界に沸くが如き人氣ある素人圍の集ひで平町の各チームもそろ〳〵練習を開始し前人氣は非常なものがあるが今回は申込も多數を豫想し意氣消沈した石城スポーツ界も漸く挽回の曙を見これがためまたもや野球熱は昂り返すものと觀られてゐる

平野球聯盟主催になる第三回石城スポンヂ野球大會は來る五月十九日午前八時から平町磐中校庭並平第一小學校庭に於て開催する筈であるがスポーツ界に沸くが如き人氣ある素人圍の集ひで平町の各チームもそろ〳〵練習を開始し前人氣は非常なものがあるが今回は申込も多數を豫想し意氣消沈した石城スポーツ界も漸く挽回の曙を見これがためまたもや野球熱は昂り返すものと觀られてゐる

石城スポンヂ野球大會
來る五月十九日磐中で
人氣立つ野球界

(十年以上)植田小頭大竹正義外百廿名(廿年以上)植田小頭赤津秀次外四十七名

△優良組員(四十九名)
(植田)三好龜男　鈴木林平　田子金光　高木一男　八代正夫　市尾爲造(勿來)前田清次郎　園部子之太　下山田辰藏　荒川恒夫　柳田昌雄　江尻裕吉　日渡保雄　秋元喜一　大友豐八(泉)佐藤進　保木數馬　江尻清四郎　渡邊桝喜代(渡邊)酒井四郎　吉田新太郎　根本二郎　大友彦次(入遠野)佐川一好　大竹光雄　高木林　鈴木茂房(上遠野)齋藤貞佳　瀨谷安重　蛭田保雄　津度菊次郎　蛭田喜嗣(山田)安島金太郎　鈴木一郎　柴田一郎　下山田善昌(錦)大平淺三　村上勇喜　星撰之助(川部)蛭田彌太郎　佐藤善一　園誠一　芳賀義一(田人)鹽塚寛　絲川義一　齋藤武之助　大橋松吉　蛭田長吾　芳賀忠夫

女房や何處
夫から捜査願

石城郡植田町大字小濱字濱太二馬妻丹野シノ(四三)は去月三十日夫の不在を奇貨として家出したので八方捜査中のところ去る五日福島平町元警察署の會議室は屢平町公會堂と云はれる郵便局の消し印ある書面を證兄なる同郡田人村綠川才次郎に寄せたお書面には福島近郊の養蠶家のもとで日雇となつてゐる模樣であり是非捜査の上取押へてもらひたいと太二馬は涙をもつて十三日福島署に捜査方を願ひでたが、裏面には複雜せる事情がひそんでゐるらしい

是非とも欲しい
平町に公會堂
設置速進の希望

平町元警察署の會議室は屢平町公會堂と云はれる郵便局の消し印ある書面を證兄なる同郡田人村綠川才次郎に寄せたお書面には福島近郊の養蠶家のもとで日雇となつてゐる模樣であり是非捜査の上取押へてもらひたいと太二馬は涙をもつて十三日福島署に捜査方を願ひでたが、裏面には複雜せる事情がひそんでゐるらしい

錦村議の參宮
石城郡錦村會議員一同は去る十

二日朝一週間の豫定で伊勢參宮に出發したが費用中村んだ荒濱が現れ死體の死の貴若干を補助し同村長金成字も見えなかつたので青田通氏より金百圓を寄附した

黒田駒
總高九千餘圓

石城郡田人村黒田駒關は十一日より三日間行はれたが成績は總賣上高九千八百六十二圓で百五十七頭一頭平均六十二圓八十一錢になつたが高橋氏が誠意を以て臨まざる限り圓滿なる解決は望み難く結果は重大なる問題を惹起するに至るものの如く觀測されてゐる

平町々會
火保契約變更

大日本火災保險協會が平町の火保率引上げを斷行したゝめ同協會平町各代理店は契約不能に陷つにが町としても各小學校の火保率引上げは殘算の關係から困難のため十三日午後四時町會を開會協議の結果協會加盟各

授業料の滯納
甚だしきは一ケ年を
平町で整理着手

昭和三年度中における平町各小學校の授業料納附成績は極めて不良で全生徒の約二割が滯納となつてゐる、然もこの中四十六名は昭和三年四月から四年三月まで一ケ年間滯納して、なほ未だに納附して來ないため町當局でも整理に手を燒いてゐるがこの滯納者の間には全く家庭の生活難からやむを得ず滯納してゐる者もあるが中には何等生活に困らに於て執行したが當日の受

昨秋　秩父宮殿下御慶賀ノ折リ力作聚明ノ猪湖ヲ獻納セシ南宗派畫家志賀宏英氏ハ猪苗代湖畔ノ產ニシテ始メ四條派ヨリ出デ新日本畫ノ作家タリシモ字源學及漢籍等ヲ修メ遂ニ南宗派ニ入リ小室翠雲ニ師事シ斯界ノ新人トシテ南宗界ニ寫生ト傳統トヲ以テ一新機抽ヲ開カントス此度風僊風景縮寫揮毫ノ材料寫生ノ爲メ石城炭坑界及海岸地方ニ來遊サレシヲ好期トシ氏ノ力作ヲ賀費ヲ以テ布タントス

發起人
猪狩清
高久忠
水野虎三郎

後援
磐城新聞社

甲種　金三十五圓　尺八絹本
乙種　金貳拾圓　尺五絹本
丙種　金拾五圓　尺三絹本
丁種　金五圓　半切二幅
　　金三圓　半切一幅

春の歡樂に
品質本位の
白馬の會
(株)どうぞ
御用命の程願上ます
辰ノ口本家
平窪　松本德一
電話(平)七五二番

芳醇銘酒

夜診
腸胃
科内　十二指腸虫病
專門
內科部　外科部
結核
淋病　婦人病　皮膚病
松村胃性腸病科醫院
(平南町電話一〇七番)
間療

レコードハ此のマーク！を
店員募集
肉聲のビクターレコード
販賣店　會田時計店
平町四丁目(電話三六二番)

新築移轉
耳、鼻、咽喉科
合津醫院
平町仲田町七一(電話五五九)

平町議
噂に上る人々
(七)
(本日休載)

築港學校視察
豐間村長の一行

十四日午前十時ころ平署へ平町新川端に死体を詰めた竹行李が漂着したと届け出

行李詰めの死体？
中から荒縄

植田警察署管内二町八ケ村春季消防聯合檢閱は十四日午前八時より植田小學校庭に於て執行したが當日の受賞者左の如し

植田署の消防檢閱
優良組を表彰

植田警察署管内二町八ケ村春季消防聯合檢閱は十四日午前八時より植田小學校庭に於て執行したが當日の受賞者左の如し

桑園保護
サイレンを設よ

石城郡方面の桑園は最近の降雨から漸く甦生し何づれも安堵の胸をなで卸したが第二の受難霜害を控へてゐるので石城養蠶同業組合では目下それ〴〵對策を講じてゐる石城郡大半洋に面してゐるため霜害があれば相當大きいので何等かの方法で完全に防止されないまでも出來る限り僅小な程度にしやうと組合にサイレンを据付けさせ危險と思ふ場合は同業組合から各組合に報知してサイレンを鳴らし各養蠶家に警告を與へる方法を講じたが經費の關係がとしてゐるが經費の關係が問題となつてゐる

萬圓を新に借り入れて繭市場を設置することは考へものだで固定資本だけでも組合から支出々來れば直ちに實現する事と思ふ